



このスバル360は「車を修理できる人にまかせたい」と、前のオーナーに言われた事がきっかけで買い取ったのが始まりだった。「いろいろと故障はつきなくってね。路上で壊れてすぐにその場で走れるようにしたり、冬場は冬場で、中まで凍っていてブレードで霜を削って乗る事もあったよ。僕は車は動いてなんぼの世界だと思ってるので、人に『もったいない』と言われるのが何しようが通勤に使っている。確かに手がかかってどうしようもないけれど、もうこの車とは、最後の最後、棺にまで持って行きたいほど。(笑)大好きな相棒だよ。」とても大柄な加賀谷さんが、この小さなスバル360を乗りこなす。

その相棒は、決して綺麗にされてはいない。(すぐに修理できるので、その乗り方はイタリア人が車を道具として徹底的に乗りこなしているような感じだ。)

車好きの特集号を作ってほしい。そしたら修理の仕方を扱った記事の協力をするよ。と、少年のような笑顔を見せてくれた。



## SUBARU360

オーナー  
加賀谷 征樹 さん  
S 4 5.5.14 生まれ  
おうし座 B型

取材協力  
秋田マシンサービス(株)

### 車に詳しい川上氏のスバル360の歴史

スバル360は、1960年代の他メーカーの軽四輪車が、非力なエンジンと重い車重のため極めて淋しい性能しか発揮出来なかったのに対して、航空機のモノコック構造を熟知しているスバルは、その利点を生かして、車体をモノコック構造にして385キロと言った車重におさえる事が出来ました。そのため16馬力の非力なエンジンで時速90キロの性能を誇りました。

私の好きなホンダN360の半分以上の出力で、この性能は特筆ものです。また独特な形状のボディ、前後とも独立懸架のサスペンションはVWと同じ方式を取り、R/Rの駆動方式と前開きのドア、スライド式のウィンドウ、そしてコンバーチブルモデルもありました。

日本の軽自動車の草創期に輝く星(スバル)でした。スバル(富士重工)の前身は、第二次世界大戦で戦闘機の「隼」や「疾風」を作った中島飛行機です。そのため飛行機のモノコック構造に熟知していた自衛隊。当時、「飛行機メーカーが作る自動車は優秀である」と評がありました。



### てんとうむし

「スバル360」には、そのかわいらしい姿から「てんとうむし」という愛称がつけられ発売後12年にわたり長く親しまれ続けました。